

磐梯山の地形：生物多様性を有する風景（地理模型）

数十万年にわたる火山活動は、磐梯吾妻・猪苗代地域の山々、湖、湿地、その他の地勢にその跡を残しました。ミネラルが豊富な火山性土はさまざまな植物種の助けとなり、高地にある湿地は高山植物や数々の昆虫の生育地・生息地となり、そして今度はこれらがその他の野生生物を惹き付けています。

およそ 40 万年前の猫魔ヶ岳の大噴火により、雄国沼やその周辺の湿地が形成されました。猫魔ヶ岳の火山性溜まりの部分的崩落により残された噴火口内に水が溜まり、いつしか 1 つの湖沼雄国沼になりました。土壌の排水が悪いため、この湖沼の南西に湿原が形成されました。雄国沼は 43 ヘクタールの広さを有し、雄国沼湿原はおよそ 100 ヘクタールにわたり広がっています。その南側にある猪苗代湖は、およそ 4 万年前に起こった磐梯山の噴火後に形成されたものです。猪苗代湖は、10,330 ヘクタールの面積を有する、日本で 4 番目に大きな湖です。

1888 年に起こった磐梯山の噴火は、灰や岩屑や泥流により周辺地域を荒廃させましたが、川をせき止めたことにより湖沼や湖も形成しました。これらの水域のうち最大のものが桧原湖（1,070 ヘクタール）、秋元湖（360 ヘクタール）、小野川湖（170 ヘクタール）です。この噴火により、火山堆積物と、ケイ酸アルミニウム、鉄、銅、マンガンなどの鉱物粒子が含まれているために起こる独特の色を呈した、30 の沼地や湖沼から成る五色沼が形成されました。

20 世紀初めには、噴火により不毛のままとなっているこの地形を活性化させようと、政府や地域コミュニティが再植林プログラムに着手しました。現在、裏磐梯エリアは重要野鳥生息地として国際的に認知されており、その森や湖や沼地はさまざまな動植物を助ける役目をする繁栄する生態系となっています。